

白未熟粒の発生と斑点米カメムシ被害を抑えて、品質向上、収量増加

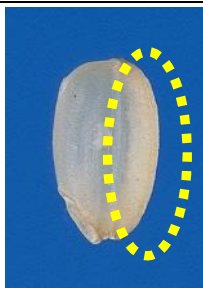
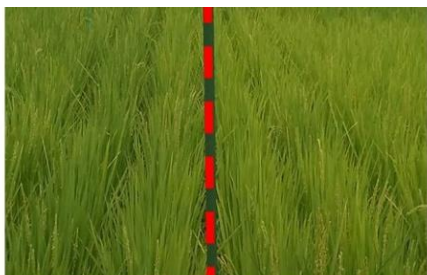
《はじめに》

近年、水稻の出穂期後の高温により、白未熟粒などの高温障害が発生しています。しかし、発生要因は高温だけではなく水稻の栽培管理にもあります。

白未熟粒は種類により発生要因が異なります。お手元に昨年産の米が残っていたら、白濁部位を確認し、発生要因に応じた対策を実施し、登熟を高め、品質向上と収量増加につなげましょう。

また、出穂期前後の水管理や、近年県内全域で問題となっているイネカメムシ被害の対策に取り組むことも、安定生産につながります。

■ 白未熟粒の種類による発生要因と対策（米粒の写真は農林水産省ホームページより引用。）

	基白粒	背白粒	乳白粒	その他未熟粒
白色不透明部の位置 (点線の囲み部分)				
主な発生要因	・出穂期後20日間の高温 (日平均気温が26℃以上) ・出穂期の葉色の低下(光合成能力の低下)		・日照不足、出穂期後の高温やフェーン現象等の乾燥風による稲体水分の低下 ・籾数過剰や倒伏(籾数当たりのデンプンの転流・蓄積不足)	
対策	○出穂期前7～5日(穂ばらみ期)に、葉色が目標値に達していない場合は、速効性肥料で追肥を施用(窒素量で 1 kg/10aを上限)しましょう。  葉色が生育目標に達している水稻(左 SPAD:36.0) 達してない水稻(右 SPAD:30.8) (「コシヒカリ」、出穂期) ※ドローンで追肥する場合、ドローン専用肥料をお使い下さい。 例 空散追肥306 3.3 kg/10a Jコート Quick 2.5 kg/10a セントラル尿素 44.5 2.5 kg/10a CORON(液肥) 希釈倍率 2-5 倍		○目標茎数の8割(「コシヒカリ」は目標穂数の8割)に達したら、速やかに中干しを行い、過繁茂防止と根張の促進を行いましょう。  中干し時に溝切りを行った圃場  中干しによる「コシヒカリ」倒伏軽減の効果 (写真左:中干し無し、右:中干し実施のほ場)	

共通の対策

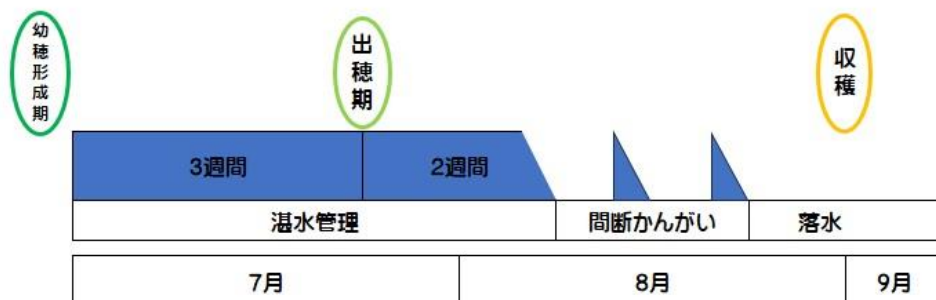


出穂期は、水稻生育予測システム「でるた」で予測し、実際には場で確認しましょう。

《対策1》根の活力を維持する水管理

出穂期の3週間前から2週間後までの期間は、湛水状態を保ち、その後は、登熟期間後半の根の活力を維持するため、間断かんがいとします。

収穫前の落水時期が早いと、白未熟粒が増加しますので、落水は出穂期後25日以降とします。
田面に大きな亀裂が入ると根が断絶され、登熟に必要な水分が不足しますので注意しましょう。



幼穂形成期以降の水管理の目安(「コシヒカリ」の場合)

《対策2》イネカメムシによる不稔、斑点米対策

近年、イネカメムシが多発生し、出穂時に加害され不稔粒が発生し、大きく減収をしたり、乳熟期に加害され斑点米(基部斑点米)が発生し品質が低下するなどの問題が発生しています。

イネカメムシは出穂直後の稲に飛来し、加害・産卵し、ふ化した幼虫も加害します。

イネカメムシ対策には、早めの防除が必要で、出穂期前の粒剤散布又は出穂期のフロアブル剤散布が効果的です。さらに、他の斑点米カメムシ対策としては穂揃期から乳熟期の追加防除も必要です。



イネカメムシに対する対策は、千葉県農林総合研究センター第62回試験研究成果発表会【作物部門】のYouTubeをご覧ください。(発表は、24分06秒から始まります)



出穂直後に加害
(稲穂に止まる成虫)



イネカメムシの吸汁
による不稔(立ち穂)



乳熟期に加害されると基部(胚芽とその周辺)斑点米になる